

身にしみて物を思へと夏の夜の螢ほのかに青引きてとぶ

(晶子)

源氏の現在の地位はきわめて重いがもう延臣としての繁忙もここまででは押し寄せて来ず、のどかな余裕のある生活ができるのであったから、源氏を信頼して来た恋人たちにもそれぞれ安定を与えることができた。しかも対の姫君だけは予期せぬ煩悶をする身になっていた。太夫の監の恐ろしい懸想とはいっしょにならぬにもせよ、だれも想像することのない苦しみが加えられているのであったから、源氏に持つ反感は大きかった。母君さえ死んでいなかっただらと、またこの悲しみを新たにすることになったのであった。源氏も打ち明けてからはいつそう恋しさに苦しんでいるのであるが、人目をばかつてまたこのことは触れない。ただ耐えがたい心だけを慰めるためによく出かけて来たが、玉鬘のそばに女

房などのあまりいない時にだけは、はつと思  
わせられるようなことも源氏は言った。あら  
わに退けて言うこともできないことであつた  
から玉鬘はただ気のつかぬふうをするだけで  
あつた。人柄が明るい朗らかな玉鬘であつた  
から、自分自身ではまじめ一方な気なのであ  
るが、それでもこぼれるような愛嬌が何にも  
出てくるのを、兵部卿の宮などはお知りにな  
つて、夢中なほどに恋をしておいでになつた。

まだたいして長い月日がたつたわけではない  
が、確答も得ないうちに不結婚月の五月にさ  
えなつたと恨んでおいでになつて、

ただもう少し近くへ伺つたことをお許しくだ  
すつたら、その機会に私の思い悩んでいる心  
を直接お洩らしして、それによつてせめて慰  
みたいと思います。

こんなことをお書きになつた手紙を源氏は  
読んで、

「そうそればいいでしょう。宮のような風  
流男のする恋は、近づかせてみるだけの価値

はあるでしょう。絶対にいけないなどとは言わないほうがよい。お返事を時々おあげなさいよ」

と源氏は言つて文章をこつ書けとも教えるのであつたが、何重にも重なる不快というよくなものを感じて、気分が悪いから書かれないと玉鬢は言つた。こちらの女房には貴族出の優秀なような者もあまりないのである。ただ母君の叔父の宰相の役を勤めていた人の娘で伶俐な女が不幸な境遇にいたのを捜し出して迎えた宰相の君というのは、字などもきれいに書き、落ち着いた後見役も勤められる人であつたから、玉鬢が時々やむをえぬ男の手紙に返しをする代筆をさせていた。その人を源氏は呼んで、口授して宮へのお返事を書かせた。聞いていて玉鬢が何と云うかを源氏は聞きたかつたのである。姫君は源氏に恋をさせやかれた時から、兵部卿の宮などの情をこめてお送りになる手紙などを、少し興味を持つてながめることがあつた。心がそのほうへ

動いて行くというのではなしに、源氏の恋か  
らのがれるためには、兵部卿の宮に好意を持  
つふうを装うのも一つの方法であると思うの  
である。この人にも技巧的な考えが出るもの  
である。

源氏自身がおもしろがつて宮をお呼び寄せ  
しようとしているとは知らずに、思いがけず  
訪問を許すという返事をお得になつた宮は、  
お喜びになつて目だためふうで訪ねておいで  
になつた。妻戸の室に敷き物を設けて記帳だ  
けの隔てで会話がなさるべくできていた。心  
憎いほどの空薫きをさせたり、姫君の座をつ  
くろつたりする源氏は、親でなく、よこしま  
な恋を持つ男であつて、しかも玉鬘の心にと  
つては同情される点のある人であつた。宰相  
の君なども会話の取り次ぎをするのが晴れが  
ましくてできそふな気もせず隠れているのを  
源氏は無言で引き出したりした。

夕闇時が過ぎて、暗く曇つた空を後ろにし  
て、しめやかな感じのする風采の宮がすわつ

ておいでになるのも艶であった。奥の室から吹き通う薫香の香に源氏の衣服から散る香も混じつて宮のおいでになるあたりは匂いに満ちていた。予期した以上の高華な趣の添った女性らしくまず宮はお思いになつたのであつた。宮のお語りになることは、じみな落ち着いていた御希望であつて、情熱ばかりを見せようとあそばすものでもないのが優美に感ぜられた。源氏は興味をもつてこちらで聞いているのである。姫君は東の室に引き込んで横になつていたが、宰相の君が宮のお言葉を持つてそのほうへはいつて行く時に源氏は言つてた。

「あまりに重苦しいしかたです。すべて相手次第で態度を変えることが必要で、そして無難です。少女らしく恥ずかしがつている年齢でもない。この宮さんなどに人づてのお世話などをなさるべきでない。声はお惜しみになつても少しは近い所へ出ていないではいけませんよ」

などと言つ忠告である。玉鬘は困っていた。

なおこうしていればその用があるふうをして  
そばへ寄つて来ないとは保証されない源氏で  
あつたから、複雑な侘しさを感じながら玉鬘  
はそこを出て中央の室の几帳のところへ、よ  
りかかるような形で身を横たえた。宮の長い  
お言葉に対して返辞がしにくい気がして玉鬘  
が躊躇している時、源氏はそばへ来て薄物の  
几帳の垂れを一枚だけ上へ上げたかと思うと、  
蠟の燭をだれかが差し出したかと思うような  
光があたりを照らした。玉鬘は驚いていた。  
夕方から用意して蛩を薄様の紙へたくさん包  
ませておいて、今まで隠していたのを、さり  
げなしに几帳を引き繕うふうをしてにわか  
に袖から出したのである。たちまちに異常な光  
がかたわらに湧いた驚きに扇で顔を隠す玉鬘  
の姿が美しかった。強い明りがさしたならば  
宮も中をおのぞきになるであろう、ただ自分  
の娘であるから美貌であろうと想像をしてお  
いでになるだけで、実質のこれほどすぐれた  
人とも認識しておいでにならないであろう。

好色なお心を遣る瀬ないものにして見せようと源氏が計ったことである。実子の姫君であつたならこんな物狂わしい計らいはしないであらうと思われる。源氏はそつとそのまま外の戸口から出て歸つてしまった。宮は最初姫君のいる所はその辺であらうと見当をおつけになつたのが、予期したよりも近い所であつたから、興奮をあそばしながら薄物の几帳の間から中をのぞいておいでになつた時に、一室ほど離れた所に思いがけない光が湧いたのでおもしろくお思ひになつた。まもなく明りは薄れてしまつたが、しかも瞬間のほのかな光は恋の遊戯にふさわしい効果があつた。かすかによりは見えなかつたが、やや大柄な姫君の美しかった姿に宮のお心は十分に惹かれて源氏の策は成功したわけである。

「鳴く声も聞こえぬ虫の思ひだに人の消つには消ゆるものかは

御実験なすつたでしよう」

と宮はお言いになった。こんな場合の返歌を長く考え込んでからするのは感じのよいものでないと思つて、玉鬘はすべく、

声はせで身をのみこがす蛩こそ言ふより  
まさる思ひなるらめ

とはかないふうに言つただけで、また奥のほうへはいつてしまった。宮は疎々しい待遇を受けるといふような恨みを述べておいでになった。あまり好色らしく思わせたくない宮は朝まではおいでにならずに、軒の雫の冷たくかかるのに濡れて、暗いうちにお帰りになった。杜鵑などはきつと鳴いたであろうと思われる。筆者はそこまで穿鑿はしなかった。

宮の御风采の艶な所が源氏によく似ておいでになると言つて女房たちは賞めていた。昨夜の源氏が母親のような行き届いた世話をした点で玉鬘の苦悶などは知らぬ女房たちが感

激していた。玉鬘は源氏に持たれる恋心を自身の薄倖の現われであると思つた。実の父に娘を認められた上では、これほどの熱情を持つ源氏を良人にするのが似合わしくないことでないかもしれぬ、現在では父になり娘になつているのであるから、両者の恋愛がどれほど世間の問題にされることであろうと玉鬘は心を苦しめているのである。しかし眞実は源氏もそんな醜い関係にまで進ませようとは思つていなかった。ただ恋を覚えやすい性格であつたから、中宮などに対しても清い父親としてのだけの愛以上のものをいだいていないのではない、何かの機会にはお心を動かそうとしながらも高貴な御身分にはばかられてあらわな恋ができないだけである。玉鬘は性格にも親しみやすい点があつて、はなやかな気分のおふれ出るようなのを見ると、おさえてある心がおどり出して、人が見れば怪しく思うほどのことも混じつていくのであるが、さすがに反省をされていて美しい愛だけでこの人

を思おうとしていた。

五日には馬場殿へ出るついでにまた玉鬘を源氏は訪ねた。

「どうでしたか。宮はずっとおそくまでおいでになりましたか。際限なく宮を接近おさせしないようにしましょう。危険性のある方だからね。力で恋人を征服しようとしなない人は少ないからね」

などと宮のことを活かせも殺しもしながら訓戒めいたことを言っている源氏は、いつもそうであるが、若々しく美しかった。色も光沢もきれいな服の上に薄物の直衣をありなしに重ねているのなども、源氏が着ていると人間の手で染め織りされたものとは見えない。物思いがなかったなら、源氏の美は目をよるこぼせることであろうと玉鬘は思った。兵部卿の宮からお手紙が来た。白い薄様によい字が書いてある。見て美しいが筆者が書いてしまえばただそれだけになることである。

今日さへや引く人もなき水隠れに生ふる  
あやめのねのみ泣かれん

長さが記録になるほどの菖蒲の根に結びつ  
けられて来たのである。

「ぜひ今日はお返事をなさい」

などと勧めておいて源氏は行ってしまった。

女房たちもぜひと言つので玉鬘自身もどついで  
うわけもなく書く気になっていた。

あらわれていとど浅くも見ゆるかなあや  
めもわかず泣かれけるねの

少女らしく。

とだけほのかに書かれたらしい。字にもう  
少し重厚な気が添えたいと芸術的な好みを持  
つておいでになる宮はお思いになったようであ  
った。

今日は美しく作った薬玉などが諸方面から  
贈られて来る。不幸だったところと今とがこん

なことにも比較されて考えられる玉鬘は、この上できるならば世間の悪名を負わずに済ませたいともつともなことを願っていた。

源氏は花散里夫人の所へも寄った。

「中將が左近衛府の勝負のあとで役所の者を皆つれて来ると言っていましたからその用意をしておくのですね。まだ明るいうちに来るでしょう。私は何も麗々しく扱おうと思っていなかった姫君のことを、若い親王がたなどもお聞きになって手紙などをよくよこしておいでになるのだから、今日はいいい機会のように思つて、東の御殿へ何人も出ておいでになることになるでしょうから、そんなつもりで仕度をさせておいてください」

などと夫人に言っていた。馬場殿はこちらの廊からながめるのに遠くはなかった。

「若い人たちは渡殿の戸をあけて見物するがよい。このごろの左近衛府にはりっぱな下士官がいて、ちよつとした殿上役人などは及ばない者がいますよ」

と源氏が言うのを聞いていて、女房たちは今日の競技を見物のできることを喜んだ。玉鬘のほうからも童女などが見物に来ていて、廊の戸に御簾が青やかに懸け渡され、はなやかな紫ぼかしの几帳がずっと立てられた所を、童女や下仕えの女房が行き来していた。菖蒲重ねの袖、薄藍色の上着を着たのが西の対の童女であった。上品に物馴れたのが四人来ていた。下仕えは樗の花の色のぼかしの裳に撫子色の服、若葉色の唐衣などを装うていた。こちらの童女は濃紫に撫子重ねの汗衫などでおおような好みである。双方とも相手に譲るものでないというふうを見せていた。午後二時に源氏は馬場殿へ出たのである。予想したとおり親王がたもおおぜい来ておいでになった。左右の組み合わせなどに宮中の定例の競技と違って、中少将が皆はいつて、こうした私の催しにかえって興味のあるものが見られるのであった。女にはどうして勝負が決まるのかも知らぬことであつたが、舎人までが

艶な装束をして一所懸命に競技に走りまわるのを見るのはおもしろかった。南御殿の横まで端は及んでいたから、紫夫人のほうでも若い女房などは見物していた。「打毬楽」「納蘇利」などの奏楽がある上に、右も左も勝つたびに歓呼に代えて樂声をあげた。夜になって終わるころにはもう何もよく見えなかった。

左近衛府の舎人たちへは等差をつけていろいろな纏頭が出された。ずっと深更になってから来賓は退散したのである。源氏は花散里のほうに泊まるのであった。いろいろな話が夫とかわされた。

「兵部卿の宮はだれよりもごりっぱなようだ。御容貌などはよろしくないが、身の取りなしなどに高雅さと愛嬌のある方だ。そのほかはよいと言われている人たちにも欠点があるいろいろある」

「あなたの弟様でもあの方のほうが老けてお見えになりますね。こちらへ古くからよくおいでになると聞いていましたが、私はずっ

と昔に御所で隙見をしてお知り申し上げているだけですから、今日お顔を見て、そのころよりきれいにおなりになったと思いました。帥の宮様はお美しいようでも品がおよろしくなくて王様というくらいにしかお見えになりませんでした」

この批評の当たっていることを源氏は思ったが、ただ微笑んでいただけであった。花散里夫人の批評は他の人たちにも及んだのであるが、よいとも悪いとも自身の意見を源氏は加えようとしないのである。難をつけられる人とか、悪く見られている人とかに同情する癖があつたから。右大将のことを深味のあるような人であると夫人が言うのを聞いても、たいしたことがあるものでない、婿などにしては満足していられないであろうと源氏は否定したく思ったが、表へその心持ちを現わそうとしなかつた。睦まじくしながら夫人と源氏は別な寢床に寝るのであつた。いつからこうなつてしまったのかと源氏は苦しい気がし

た。平生花散里夫人は、源氏に無視されてい  
ると腹をたてるようなこともないが、六条院  
にはなやかな催しがあっても、人づてに話を  
聞くぐらいで済んでいるのを、今日は自身の  
所で会があつたことで、非常な光栄にあつた  
ように思っているのであつた。

その駒もすさめぬものと名に立てる汀の  
菖蒲今日や引きつる

とおおように夫人は言った。何でもない歌  
であるが、源氏は身にしむ気がした。

には鳥に影を並ぶる若駒はいつか菖蒲に  
引き別るべき

と源氏は言った。意はそれでよいが夫人の  
謙遜をそのまま肯定した言葉は少し気の毒で  
ある。

「二六時中あなたといっしょにいるのでは

ないが、こうして信頼をし合つて暮らすのはいいことですね」

戯れを言うのでもこの人に対してはまじめな調子にされてしまう源氏であつた。帳台の中の床を源氏に譲つて、夫人は几帳を隔てた所で寝た。夫婦としての交渉などはもはや不似合いになつたとしてゐる人であつたから、源氏もしいてその心を破ることをしなかつた。

梅雨が例年よりも長く続いていつ晴れるとも思われないころの退屈さに六条院の人たちも絵や小説を写すのに没頭した。明石夫人はそんなほうの才もあつたから写し上げた草紙などを姫君へ贈つた。若い玉鬢はまして興味を小説に持つて、毎日写しもし、読みもすることには時を費やしていた。こうしたことの相手を勤めるのに適した若い女房が何人もいたのであつた。数奇な女の運命がいろいろと書かれてある小説の中にも、事実かどうかは別として、自身の体験したほどの変わったことにある人はないと玉鬢は思つた。住吉

の姫君がまだ運命に恵まれていたところは言うまでもないが、あとにもなお尊敬されているはずの身分でありながら、今一步で卑しい主計頭の妻にされてしまう所などを読んでは、恐ろしかった監のことが思われた。源氏はどこの御殿にも近ごろは小説類が引き散らされているのを見て玉鬘に言った。

「いやなことですね。女というものはうるさがらずに人からだまされるために生まれたものなんですね。ほんとうの語られているところは少ししかないのだろうが、それを承知で夢中になって作中へ同化させられるばかりに、この暑い五月雨の日に、髪の毛の乱れるのも知らずに書き写しをするのですね」

笑いながらまた、

「けれどももそうした昔の話を読んだりすることがなければ退屈は紛れないだろうね。この嘘ごとの中にほんとうのことらしく書かれてあるところを見ては、小説であると知りながら興奮をさせられますね。可憐な姫君が物

思いをしているところなどを読むとちよつと身にしむ気もするものですよ。また不自然な誇張がしてあると思ひながらつり込まれてしまふこともあるし、またまずい文章だと思ひながらおもしろさがある個所にあることを否定できないようなものもあるようです。このごろあちらの子供が女房などに時々読ませているのを横で聞いていると、多弁な人間があるものだ、嘘を上手に言い馴れた者が作るのだという気がしますが、そうじゃありませんか」

と言つと、

「そうでございますね。嘘を言い馴れた人がいろんな想像をして書くものでございませうが、けれど、どうしてもほんとうとしか思われないのでございませうよ」

こう言いながら玉鬘は硯を前へ押しやった。

「不風流に小説の悪口を言つてしまいましたね。神代以来この世であつたことが、日本紀などはその一部分に過ぎなくて、小説のほ

うに正確な歴史が残っているのでしょうか」

と源氏は言うのであった。

「だれの伝記とあらわに言つてなくても、善いこと、悪いことを目撃した人が、見ても見飽かぬ美しいことや、一人が聞いているだけでは憎み足りないことを後世に伝えたいと、ある場合、場合のことを一人でだけ思つていられなくなつて小説というものが書き始められたのだらう。よいことを言おうとすればあくまで誇張してよいことづくめのことを書き、また一方を引き立てるためには一方のことを極端に悪いことづくめに書く。全然架空のことではなくて、人間のだれにもある美点と欠点が盛られているものが小説であると見ればよいかもしれない。支那の文学者が書いたものはまた違つし、日本のも昔できたものと近ごろの小説とは相異していることがあるでしょう。深さ浅さはあるだらうが、それを皆嘘であると断言することはできない。仏が正しい御心で説いてお置きになつた経の中に

も方便ということがあって、大悟しない人間はそれを見ると疑問が生じるだろうと思われる。方等經の中などにはことに方便が多く用いられています。結局は皆同じことになって、菩提心はよくて、煩惱は悪いということが言われているのです。つまり小説の中に善悪を書いているのがそれにあたるのですよ。だから好意的に言えば小説だって何だって皆結構なものだということになる。」

と源氏は言って、小説が世の中に存在するのを許したわけである。

「それにしてもね、古いことの書いてある小説の中に私ほどまじめな愚直過ぎる男の書いてあるものがありますか。それからまた人間離れのしたような小説の姫君だってあなたのように恋する男へ冷淡で、知って知らぬ顔をするようなのではないでしょう。だからありふれた小説の型を破った小説にあなたと私のことをさせましょ。」

近々と寄って来て源氏は玉鬢にこうささや

くのであった。玉鬘は襟の中へ顔を引き入れるようにして言う。

「小説におさせにならないでも、こんな奇怪なことは話になって世間へ広まります」

「珍しいことだというのですか。そうです。

私の心は珍しいことごときめく」

ひたひたと寄り添ってこんな戯れを源氏は言うのである。

「思ひ余り昔のあとを尋ねねど親にそむける子ぞ類ひなき

不孝は仏の道でも非常に悪いことにして説かれていきます」

と源氏が言っても、玉鬘は顔を上げようともしなかった。源氏は女の髪をなでながら恨み言を言った。やっと玉鬘は、

古き跡を尋ねねどげになかりけりこの世にかかる親の心は

こう言った。源氏は気恥ずかしい気がしてそれ以上の手出しはできなかつた。どうこの二人はなつていくのであるう。

紫夫人も姫君に託してやはり物語を集める一人であつた。「こま物語」の絵になつているのを手に取つて、

「上手にできた画だこと」

と言いながら夫人は見ていた。小さい姫君が無邪気なふうで昼寝をしているのが昔の自分のような気がするのであつた。

「こんな子供どうしても悪い関係がすぐに見えるじゃありませんか。昔を言えば私などは模範にしてよいまれな物堅さだつた」

と源氏は夫人に言った。そのかわりにまれなことも好きであつたはずである。

「姫君の前でこうした男女関係の書かれた小説は読んで聞かせないようにするほうがいい。恋をし始めた娘などというものが、悪いわけではないが、世間にはこんなことがある

のだと、それを普通のことのように思っ  
てしまわれるのが危険ですからね」

こんな周到な注意が実子の姫君には  
払われているのを、対の姫君が聞いたら  
恨むかもしれない。

「浅はかな、ある型を模倣したにすぎ  
ないような女は読んでいましていいや  
になりますよ。」

空穂物語の藤原の君の姫君は重々し  
くて過失はしそうでない性格ですが、  
あまり真直な線ばかりで、しまいま  
で女らしく書かれてないのが悪いと思  
うのですよ。」

と夫人が言うと

「現実の人でもそのとおりですよ。風  
変わりな一本調子で押し通して、いい  
かげんに転向すること知らない人はか  
わいそうだ。見識のある親が熱心に  
育てた娘がただ子供らしいところ  
にだけ大事がられた跡が見えて、そ  
のほかは何もできないようなのを見  
ては、どんな教育をしたのかと親ま  
でも軽蔑されるのが気の毒ですよ。  
なんといいてもあの親が育

てたらしいよいところがあると思われよう  
な娘があれば親の名誉になるのです。作者の  
賞めちぎつてある女のすること、言うことの  
中に首肯されることのない小説はだめですよ。  
いつたいつまらない人に自分の愛する人は賞  
めさせたくない」

などと言つて、源氏は姫君を完全な女性に  
仕上げることに一所懸命であつた。継母が意  
地悪をする小説も多かつたから、その反対な  
継母のよさを見せつける気がして夫人はそん  
なものをいつさい省いて選択に選択をしたよ  
いものだけを姫君のために写させたり絵に描  
かせたりした。

中將を源氏は夫人の住居へ接近させないよ  
うにしていたが、姫君の所へは出入りを許し  
てあつた。自分が生きている間は異腹の兄弟  
でも同じであるが、死んでからのことを思う  
と早くから親しませておくほうが双方に愛情  
のできることであると思つて、姫君のほうの  
南側の座敷の御簾の中へ来ることを許したの

であるが台盤所の女房たちの集まっているほうへはいることは許してないのである。源氏のためにただ二人だけの子であったから兄妹を源氏は大事にしていた。中將は落ち着いた重々しいところのある性質であつたから、源氏は安心して姫君の介添え役をさせた。幼い雛遊びの場にもよく出会うことがあつて、中將は恋人とともに遊んで暮らした年月をそんな時にはよく思い出されるので、妹のためにもよい相手役になりながらも時々はしおしおとした気持ちになつた。若い女性たちに恋の戯れを言いかけても、将来に希望をつながせるようなことは絶対にしなかつた。妻の一人にしたいと心の惹かれるような人も、しいて一時的の対象とみなして、それ以上関係を進行させることもなかつた。今でも緑の袖とはずかしめられた人との関係だけを尊重して、その人以外の人を妻に擬して考えることは不可能であつた。許されようと熱心ぶりを見せれば伯父の大臣も夫婦にしてくれるであろう

が、恨めしかったところに、どんなことがあつても伯父が哀願するのだから結婚はすまいと思つたことが忘れなかつた。雲井の雁の所へは情けをこめた手紙を常に送つていても、表面はあくまでも冷静な態度を保つていたのである。この態度をまた雲井の雁の兄弟たちは恨んでいた。

玉鬘に右近中将は深く恋をして仲介役をするのは童女のみるこだけであつたから、たよりになさにこの中将を味方に頼むのであつた。

「人のことではそう熱心になれない問題だから」

などと左中將は冷淡に言つていた。

内大臣は腹々に幾人もの子があつて、大人になつたそれぞれの子息の人柄にしたがつて政權の行使が自由なこの人は皆適した地位につかせていた、女の子は少なくて後の競争に負けた失意の人になつてゐる女御と恋の過失をしてしまった雲井の雁だけなのであつたから、大臣は残念がつていた。この人は今も撫

子の歌を母親が詠んできた女の子を忘れなかった。かつて人にも話したほどであるから、どうしたであろう、たよりない性格の母親のために、あのかわいかった人を行方不明にさせてしまった。女というものは少しも目が放されないものである、親の不名誉を思わずに卑しく零落をしながら自分の娘であると言っているのではなからうか、それでもよいから出て来てほしいと大臣は恋しがっていた。息子たちにも、

「もしそういうことを言っている女があったら、気をつけて聞いておいてくれ。放縦な恋愛もずいぶんしていた中で、その母である人はただ軽々しく相手にしていた女でもなく、ほんとうに愛していた人なのだが、何でもないことで悲観して、私に少ない女の子一人をどこにいるかもしれないとされたのが残念でならない」

とよく話していた。中ほどには忘れてしまったのであるが、他人がすぐれたふうになを

かしく様子を見ると、自身の娘がどれも希望どおりにならなかつたことで失望を感じる  
ことが多くなって、近ごろは急に別れた女  
子を思うようになったのである。ある夢を見  
た時に、上手な夢占いをする男を呼んで解か  
せてみると、

「長い間忘れておいでになったお子さんで、  
人の子になっていらっしやる方のお知らせを  
お受けになるというようなことはございませ  
んか」

と言った。

「男は養子になるが、女というものはそう  
人に養われるものではないのだが、どうい  
うことになっているのだらう」

と、それから時々内大臣はこのことを家  
庭で話題にした。